

在家仏教講演会 開催ご案内

東京 時間：午前10時～11時30分
会場：中野サンプラザ7階研修室10または13（中野区中野4-1-1）
会場整理費：700円 お問合せ：03-6684-6692

1月11日（土） 心を見つめて迷悟を知る—三国に渡る変遷
袁輪顕量 先生 東京大学教授

1月25日（土） 迷いからの脱出—大悲の光明に照らされて
本多弘之 先生 親鸞仏教センター所長

2月8日（土） 迷いからの脱出 —迷わない方がおかしいでしょ！
末木文美士 先生 東京大学名誉教授

2月22日（土） 迷いからの脱出—縁起的主体性の実現
ケネス田中 先生 武蔵野大学名誉教授

3月14日（土） 迷いからの脱出—仏智に導かれ
丘山 新 先生 浄土真宗本願寺派総合研究所所長

3月28日（土） 迷いからの脱出
島蘭 進 先生 上智大学教授

大阪 時間：午後3時～4時30分
会場：堂島アバンザ5階会議室（北区堂島1-6-20）
会場整理費：500円 お問合せ：06-6346-7000

3月 6日（金） 老いを受け入れ、共に生きる
奈倉道隆 先生 東海学園大学名誉教授

5月15日（金） 演題未定
西山 厚 先生 帝塚山大学文化創造学科教授

いのち尊し

第33号
いのち尊し
令和2年1月1日
公益社団法人 在家仏教協会
〒101-0062
東京都千代田区 神田駿河台3-3 五明館ビル202号
TEL 03-6684-6692
FAX 03-6684-6709

輪読会「鈴木大拙を読む」報告六
日本の霊性の胎動と仏教

常包芳樹（協会会員）

輪読会「鈴木大拙を読む」の第
六回会合が、十二月十八日午前十
時から、在家仏教協会事務所で
開催された。参加者は六名、テキ
ストの範囲は角川文庫版八二頁か
ら百五頁まで。

*

今回は第二篇の最初から。仏教
が日本の霊性として顕現した背景
がテーマ。切り口は大きく分ける
と三点。（一）仏教は外来か（二）
中国での仏教の変容（三）鎌倉時
代に日本の霊性が自覚された理由
である。

第一篇との重複もあり、適宜前
にもどって内容を確認しつつ、読
み進めた。最初のテーマについて、
大拙は「仏教が外来のものか否か
ではなく、始めに日本民族の中に日
本的霊性が存在して居て、その霊
性がたまたま仏教的なものに逢着

して自分のうちから、その本来の
具有底を顕現したということに考
えたい（角川版八五頁）と記す。
こう書かれると、仏教と出会う前
の日本の霊性をどう理解するの
か疑問になる。

次に、中国へ入った仏教は先祖
崇拜の伝統をもつ中国の宗教性
とぶつかり、反発を受けつつ変容し
たと大拙は記す。インドで深まっ
た仏教思想は、中国では現実生活
の利害を基本にする「現世利益」の
仏教になったとも言える。本書では
全体的に中国仏教への評価は辛い。

第三のテーマに入ると、日本の
霊性の核ともなる日本仏教は、イ
ンド的要素も中国的性格も兼ね備
えたとし、それは、「大東亜」を
引きくくる（九五頁）とある。戦
時状況を意識した表現のようだ。

しかし、ここは少々行き過ぎて、
大拙は戦争に協力したとの批判に

つながるところでもある。

続いて、大拙は日本の霊性が現
れた背景に関して、おおよそ次の
ように記す。「平安時代を支えた政
治が崩壊の兆しを見せ、民族精神
は不振に陥る中で鎌倉時代に入る。
この時期に蒙古襲来の危機が重な
つた。この状況に武士、農民層が反
応して、日本の霊性を響かせた」。
この見方に異論はないが、大拙は
他の箇所でも蒙古襲来の言葉を再
三使っており、外圧を強調してい
る印象を受ける。

*

報告後の参加者の議論では、仏
教と出会う前の日本の霊性の中身
を、どう理解すべきか問題提起が
あった。これに対しては当時の戦
時状況の中では、日本を強調せざ
るをえない面があったこと、また、
巻末解説にあるように、大拙は全
体主義的精神に覆われた当時の雰
囲気に、一石を投じる意味から霊
性概念を持ち出したと理解すべき

である、など意見が出された。
中国仏教への見方に関連して、
老荘思想の影響を受けていた大拙

がなぜその点に言及しなかったの
かも問題が提起された。参加者で
議論した結果、敵国中国を持ち上
げることもできず、老荘に関して
沈黙したのではないかと、ここで
も戦時状況が大拙の筆に影響を及
ぼしたことが印象づけられた。

大拙の戦争協力批判に関しては、
当時の雰囲気など配慮すると仕方
なかったと受け止めるべきとの意
見や、大拙批判の急先鋒とされた
外国人若手研究者のことなど話題
に上がった。巻末解説者の末木文
美士氏など研究者の分析によれば、
多くの仏教関係者や知識人が沈黙
を続ける中で、大拙は戦況の進行
とともに戦争批判を強めていった
というのが事実らしい。

蒙古襲来に関連し、日蓮の言説
に関するコメントもあり、当時の
日本の危機感などを議論した。大
拙が本書を執筆した時期に同じよ
うに外圧を受けていた日本を重ね
ると、鎌倉時代と仏教と日本の霊
性を接続させた大拙の意図が見え
てきた。

今回の読みを通じて、屈折した
大拙、語らなかつた大拙の姿が浮
かび上がった。次回は一月十五日
で、霊性の中身が主題となる。

仏教と私

「終活」論議は不謹慎か

菅原伸郎
(協会公員)

朝日新聞二〇一九年十一月二十七日朝刊に《「人生会議」ポスターに批判——厚労省、発送取りやめ》という記事が載っていた。

《人生の最終段階でどんな治療やケアを受けたいか、家族や医師らと話し合っておく取り組みの普及啓発のために厚生労働省が作ったポスターだ。批判が多く寄せられ、予定していた自治体への発送を見合わせた》というのだ。そのポスターでは、タレントの小藪千豊（こやぶ・かずとよ）さんが患者役でベッドに横たわり、苦しそうな表情で「人生会議しよ」と



呼びかけている（別掲）。記事によると、この取り組みはアドバンス・ケア・プランニング（ACP）と呼ばれ、厚生労働省は「人生会議」の名で推進しようとしていた。しかし、ポスターが公開されると、SNSなどで「不安をおおる」「当事者への配慮に欠ける」といった批判が寄せられた。翌日の読売新聞には「患者の気持ちを傷つける」「死を連想させる」といった声も紹介されていた。

*

取り組みの背景には、安楽死や尊厳死、終末期医療、臓器移植、さらには遺産相続といった問題について、家族、医師や看護師、そして病院や行政機関に困惑や混乱があるのだろう。だから、患者本人や高齢者が少しでも元気なうちに「人生会議」で話し合っておこう、と呼びかけているのだ。いわば「終活」を迎えるに当たっての試みともいえそうだ。

ごく当然の呼びかけとも思えるのだが、少なからぬ人たちは「不謹慎」と受け取ったようだ。この幸せいっぱいの社会では、そのようなかもしれない。たしかに悲しいポスターではある。しかし、だからといって逃げていていいのだから

うか。そもそも「死を連想させる」ことはそれほど悪いことなのか。

たとえば高齢者や難病患者にとつて、死はそこまで迫っている、いわば喫緊の、いや日常の問題である。「不安をおおる」などと言っただけではいられないはずだ。前記の朝日新聞の記事によれば《ACPや緩和ケアの正しい知識が広く伝わってくれば》と前向きな投稿もあつたようだ。

一連の記事を読んで思い出したのは『ブツダ最後の旅——大バリニッパーナ経』（岩波文庫、一三二頁、中村元訳）である。八十歳になつて死期の近いことを知った釈尊は「自灯明、法灯明」などの心構えを弟子たちに説いていく。たとえば《お前たちは修行完成者「私」の遺骨の供養にかかずらうな……正しい目的に向かって怠らず、務め、専念しておれ》などご自分の葬送について指示してもおられた。彼なりの「人生会議」だったのであろうか。



会員を募集しております

年会費

★賛助会員 一万七千円（一口）

★正会員 八千円

会員へのサービス

★月刊誌「大法輪」・機関紙「いのち尊し」を毎月お届け

★在家仏教講演会の動画を視聴

★協会六十周年記念誌の贈呈
「講演集」悲喜をよるこぶ・「対談集」掌を合わせて生きる

お電話またはメールにて、お申込み下さい。電話・03-6684-6692 メール:kamimura@zaikbukkyo.com 担当 上村

「寄付のお願い」

当協会は、東京、大阪にて講演会活動を行っておりますが、その多くは寄附金によって賄われております。講演会の存続のために温かいご支援をお願い致します。

協会への寄附金は税制優遇が受けられます。個人様からの寄附と法人様からの寄附について、事例を上げてご案内いたします。

★所得税

原稿をお待ちしています

◇「仏教と私」（八百字以内）
人生を振り返って仏教と出逢ったときの感動をお書きください。
◇読者からの手紙（八百字以内）
講演会（講演録）の感想などをお書きください。

◇コラム「この一冊」（八百字以内）

感銘を受けた書籍を紹介してください。新刊だけでなく、思いついた本も歓迎します。著者名、出版社名、発行年を忘れずに。

*

原稿用紙またはメールに添付して、左記宛てにお送りください。住所、氏名、電話番号、よろしければ職業と年齢もお書きください。読みやすくするために、あるいは編集上の都合で、趣旨を変えない範囲で削ったり直したりする場合があります。採用分には薄謝をお送りします。

原稿の送り先は、〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台三二二 五明館ビル 二〇二 在家仏教協会「いのち尊し」係。メールはkamimura@zaikbukkyo.comです。

所得金額から「寄付金（所得金額の40%が限度）2,000円」を控除することができます。

事例

年中の総所得金額が500万円、寄附金の合計額が20万円の場合、20万円×2,000円＝19万8,000円が、総所得金額より控除されます。

★法人税

法人が支出する寄付金は、その法人の資本金等の額、所得の金額に応じた一定の限度額までが損金に算入されます。このとき、公益法人に対する寄付については、一般寄付金の損金算入限度額とは別に、別枠の損金算入限度額が設けられています。

事例

資本金が10億円、年中の所得金額が1億円の場合

①一般損金算入限度額Ⅱ（10億円×2.5/1000）+（1億円×2.5/1000）×0.25
Ⅱ125万円

②別枠の損金算入限度額Ⅱ（10億円×3.75/1000+1億円×6.25/1000）×0.5
Ⅱ500万円

したがって、①②の合計額625万円の損金算入が認められます。

在家仏教通信

「大法輪二月号」に在家仏教講演会の講演録が掲載されました

「企業活動と宗教―宗教的理念なき企業は消え去って行く」

柴田文啓（開眼寺住職）

平成三十一年二月九日（土）中野で開催されました連続講演会「宗教と労働」において、柴田文啓先生よりお話を伺いました。柴田先生は、長年横河電機にお勤めになり、退職後、僧侶になられ企業での研修などユニークな活動をされております。仏教を学ぶ意義と、経営者に宗教的思考を持つことの必要性を訴えられました。

「人間として生まれてきたこと

在家仏教協会 四つの信条

- 一、 釈尊の説法虚言ならずと信じていること。
- 二、 釈尊の説法の内容そのものは永遠の真理であるが、それを大衆に知らせる手段は、時と処と人に応じつねに新鮮でなければならないこと。
- 三、 呪術らしきものは一切排除すること。
- 四、 在家生活のまま仏教に生きようとしていること。